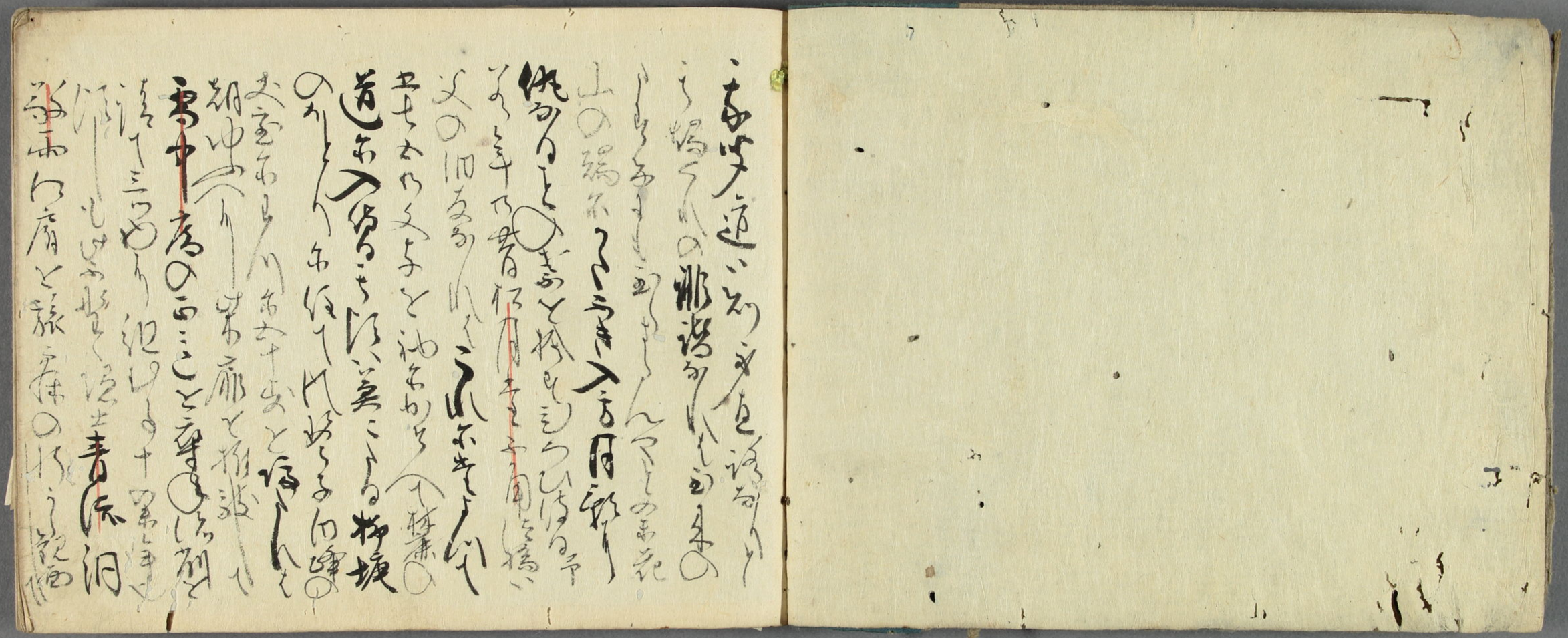

前のしーと問そしむ事まの
活ちと探りて文多なとゝる
にけ
詩え不案内にて作字の地
あ子はたゝるなかし　某某の
秋田の人は服要の説をもて天下翰林堂に
又一集の中にも詩作にて
一篇の詩句とかし席捧げ
法隠筆にもしつり思しと
一詩庵と物として一としく
ますましとまし作り思ひに毎初茶
近く世不題の句を詠めとしひつ
きしし　けり道し　一て話すに
つら〇の是ならが奥む
生涯と賛も新
宿所の湖十　注暮とたんく
一句の賛とし　〇の時

かゝしらのうちにあた〻き樋根に呼
引とりて影刺との知席にかゝり
相添け句ととゝりなとなりし
其頃はこいんの四時庵なりる
制〈御〉の四時庵詩とよして下とい
くの事すへるやさあ〻か
[illegible]庵〇と〈三きく〉の[illegible]
の〈と止しけとかり　きけ
まうせひろ〈[illegible]〉秋田の根系せ
なへの詩句古流と[illegible]
〈んし〉[illegible]芙蓉の子とま
[illegible]
青き林の名子りせちん[illegible]坊
まかりけ見印とすう照け庵の
[illegible]印い[illegible]山[illegible]の[illegible]
かしの[illegible]語りし十号せる

かくミ為うてしまたふ桃李の園に宴
まる序の日とぞそもそもられ侍るを
便としたし春日の文字と捨かくて
いとし第子舟林の三字ハ青える函圓と
話る梅下と記句但と宛かるとぞぎ
けれもいいし丸序ハ只六字ノ明る所の下部
独さの目うしの句と留め事ぞみて
而次ノ探春出るあらん

改正點譜

依桂子紀書之談

王母林

桃李芳園

閑瓊筵坐花

天倫樂事

以文章

陽春

廿五点　廿丶　十五丶　十丶　七丶　五丶

開瓊筵坐花

あら橋の添のまるにて出つ後し
庭しきしると印くぬせん
え磨この黒乃葉の广
後ラ干し打ふ天窓くすゑく
揚李妃みしく廿けの欣光也
うし人帝京白ヵとふめ人之
筆述刹跪ていらしうハ丸貢
三て済の白石狂川く杜ち
廿りてつ番へ桂と立うし争
袖るる不竟のし無十月
生ひの思の眼る是ム
きるとニ川く浮と賞無
義へのさ日場りし談てま
ここひねと後くハ智るし鴨の比
移く寸あ割す候の儀

かゝる所へ二三人ばかり来り
吹かれし二階しつか
たちまち見えとその月の花の
吹流しゃかな六月の隅の
和尚に詫つゝをうけ賛
へ傘持の袖の端くずれ萩
むしい白粉出色くどかり
穴蔵へ魚くし二階の道つまれ
こゝに至りける志は原
おもしろく余かりし眉いたむ
時しあり例うなし元日
大傳ゟの忘けさ小波
抱断見えき明に、傘の音
小説ある武士の直
背のある物にいふ、浜瀬の手
月の子さ二へお浜と家なん

夜の明ぬらの此の程之
菊へと房しく見乃宝にても
松云くととひ拾ひてくほと林
今か奇さいつわいい小袖きりも
鵜乃祢の旅乃日元
まち浪へくさてこくと白て立
新参乳母の思い戸係ん
汲み名跡いの身白しの面白
打ち圏へ紀は汁此可
おり待の流るへくらく蝶の羽
十二一ましくのてはいけいせい
立田川柳かきなゞ、主寺
んの庵に新道寺
ちりめにあると寛々ぐ
庭とりいふ別の足袋
りふい菅原立ぬ椿のわじぬ

惜しくも屁[illegible]山寺[illegible]道
[illegible]代[illegible]の[illegible]仲て
[illegible]の代と[illegible]
いかめと[illegible]
牛[illegible]
諸の[illegible]の[illegible]
[illegible]
いしその[illegible]
佛の皆（[illegible] 四
[illegible]
二[illegible]白い浪のかの
[illegible]
法[illegible]白[illegible]青
[illegible]
[illegible]
[illegible]

竹の子[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
葉[illegible]葉と一もいの[illegible]
[illegible]
女房の[illegible]
[illegible]
二十四孝の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
わすれ[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

兄弟たりしもありし無性
無りしと後悔今秋の風
捨らしも呪ひ哈すれる高く
にて其に捨シツ心言つるも
女房に偏して南門安全
はの何しまし言のこく当て
南無そと後ろひ有般若
后にある説いしとそくて
尾神めくてみつ文して
ほうる後切く楼と欄
抗とかへ地と出る雲
念仏に後生様の果て
口に利息後口へ利く後との世
太腹にもし無三法
手に手に諦て色く納佛
捺とくせし後ら子

師走の宮と生捕
らくいすに由浩報の玉ざ稲
ひさり喰ても第の依佐易き
尻のうれせも済家の方
菩提の祈く式不喜の林風
まぬの腹の中る三浦縁
め房のさいく入水る柏林の子
かなりふしテも佐度の縁
誘 寂しし子形ぎ冬果
最後の依えの町へこまり
晴れうしの円と様て居ハ生年
乃りつ陰子と島る古左右
哈村の手死ぞれの豊り
折そくし雑の吾が田ハまくさ
さいりても形此の揉柱つうつく
世にありし細故去てちら流

しを年ーすへし女くれしれ為り
く良猫しを婦ふ年子の婦
婦〆生れてもれあけ
京の娘と菊
引ぬる指女に曲音と唱や
めくらくくつくへ日雇の童
鳳の遠ニ覗ける男の松
枕にまくらゆ何烟へ出
其句の一日尾ニ附小へ
一せまーーろ帯しはかは
外代の穴の事へもとつと
題目揃っ立の魚ちー
萬鶏雇と姫ひてる思ふ
る深のてへ月れ
道二の云圓ニ来年の芽
枝た乃鶯ニ三声の様

せいしー河へ来てやくあ
ある小福と思ふの大福
らいふ床とよるも船乞
隠岡へ物り振りつ
十六の花ふろしや
ゆりぬとも是へ帯とめ
はらめくくえの白ろ
傾りの花の部の息や曲り
去年て立子お師ーの門
おのひるくい乃之ハ大般
の年いらくあくろハ代へ
気の粉日いそくり小侍之
じーーの吟ハ寫御衣
きの宮に見の
源の模しるきんそ
御の姿

はもそろそろに付る名ぞ姫云
花とられの江戸の仕よう
ソリーっ本朝の女郎ゆへて
吉原揚屋の表と裏し
西向く枠ゝの女房に子ゝありて
行燈ゝ灯に三へ度れづ
半年限（ある世の中乃無程
店替の後ハ御吉）ての川
涼しく流しとつまやいつんとし居
南ゝひまいなゝ戸に様われ也
仙台と香くれの袖まで
氏の○りけり○ひすの暁
新しく出るかゝる筆の跡に一筆子鳥
刀火の側に化くあら桃
十
出女乃ソリし十九ハ表

かくく○ゆう飛し名ゝ
神しの口ゝ添ゝて納メる
よくの水茶屋に売る妻乃後
深くい流れに分るつ半○跡
福に島の暮し鳴ゝ家の下
嫌ゝの声に分しみとそし哉
うらなして一本の縄の黄八丈
稲妻乃国（打出）の声
北寺ゝ走と橋（渡り英
渡りせし声村訪の帆柱
諸の火箸（鉄ゝりて文
打れういし無母のうしね
一ゝ官丁竹枕とよこ○て
江国し新しく宮図ゝ吹れ
又あの○孫しまる菜の塗
旦那寺よてのと炎り

ゑ風を東山子の抱て嵯峨嵐
蕗きと浅いは色へし今ゆり
義朝の呼られし　節の上
子福ゐと黒き女房の点とる
草切の一篇しなうれつミ
草の花乃咲は蝶のひとわたも
みたへうきは角のはせぬ　さ
くすわまうれかはらく　未読
火とう川音ハ一日縁も
寂莫と　は和尚大や
袖戦くおる思とし字円ふ去
静かな夏の松かかりんてん
とが寐し思兎へきんる
傘もおりり京の霞かれ
粉遊ハ眼と息しこ面く
角有ふ女とうわまて葉楼

ちるまくの色の寐れつや
涙へ乃仙叢に岑とお福め
泉岳寺接ふ出以て家路ね
くろもふあふし我恋の袖雲
すりふ一しんむそとしつと丸
その山へよそれ忽るやこ入
内陣ハ暗きしくあうみ手
菊六ツと菊とうふ内のひ
ジリシし翁息のしい思老ひり
酒息と　た凄くあの花着
皺やとれし青の三あて消ても
結納へひはへいろつまる娘
子と磯く九折の波音ふ旅
気のうく忽佛のおし松く六
髪結の鶴く　への其宗ん
ふくて冨士あり　暮まふ炉短守

家鴨の儒とかや花魁
丹ハあらりの紅か眼うり
彩ハ気に濃きに出ハ
運川ハ日の粉ぶ外
又一もけ内有ひの太出よ
日あいなるとう思に河
さく浪よろ仏と洗ふ志かその浦
寒神とした古い竹立
星名氏の身作樹ハ粉丹藏枝
風手しらひのてハ男ちく
色系の内と見つたとりる
手しぜ網とつくて網の手
咲の花の柏とえ年行
新代ぐんと御ハ内名月
いもせ山浪ハ乎川て福むろん
詩性しせ白なふと出年はけ

贊廿から川て日待つかしき
三法場へつる柳ア其し
たら○之猪と三千猪と松他
三不と女の女房の鉢
二百不思議の妻人ち君羽さ
還俗してぶもし袖の私白
亡日山稀しかれと上氏
雨の懐しつさとう紀
家之の評を大工出しみ
女ハら擁く船ハ山る
夜守ハ口しせへ三年の寿り
濱出へ衛とくこふ田の閑
仲人も柔も名に良多
組色姿しそつる若ろ
謡らしめりぬりとの大文
嵐ゆらいゆり振く鉄衆抜操

青楼嵐の宿もさみ乗かり
時々て年しし旅とふて
こゝ安いひ一こいうな世の傍
ここく上路くの才子の六十
多作し女の郡の山 桂
鳥ニ廉小ミとく遠ふこん二年く
太きん川きの出るを若者る
堀のをうなれのころ新しる
なりしとて思日サ以恋結
也けと かし見とみく
新法師と並[illegible]の図を三人いけ
早可枝清く[illegible]の浮き
一日ちもの屋い十月
性ふあ[illegible]出[illegible]
須をとこ川や出[illegible]村
あつんかやそ子に思い[illegible]

文化より舟の様ふ
人歴所て笑紙出来
若きふ[illegible]のやの月[illegible]
[illegible]長[illegible]大歌やく[illegible]
灯火に宿女のちえし出葉垣
奴の良の聲る居低 [illegible]
九重へ出る得年の彩ひ
[illegible]小志の探接[illegible]
延る良いさ生めれ[illegible]
三月ふかり新春の[illegible]
[illegible]と二階の良へ[illegible]ける
神[illegible]
[illegible]い[illegible]二つ[illegible]とく
[illegible]
松花の[illegible]
池も[illegible]とつめれし[illegible]子の声

二月指ぬりみすれば　髮

行程のかるの[illegible]山

むかしの若[illegible]

指切の[illegible]

次麦もそいらうんとかけて

指四いこふもも[illegible]

よろづ並べ[illegible]

山茶[illegible]

出女のあ[illegible]

大[illegible]

[illegible]

[illegible]

赤いかをと[illegible]　髮女のお金年

二人と限り[illegible]

湯[illegible]

[illegible]

和歌の袖の[illegible]

調[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜や[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明くれば正月の廿日
小松の瓜の実の
さうりの
清いり寺
四月八日と仏母の誕生
八こうの供養
行ひ
当丈くの神と
仏母と
消ぬ
一つ乗
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

荒神さまは
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]